愛媛大学医学部
同窓会会報

2014 NOVEMBER No.30

発行日／平成26年11月1日
編集発行人／高田　清式
発行／愛媛大学医学部同窓会
〒791-0295
愛媛県東温市志津川
TEL(089)960-5231
印刷／原印刷株式会社
TEL(089)974-8711

表紙写真紹介

図書館 医学部分館

平成26年2月28日増築・改修
学びのための環境が充実

CONTENTS

会長挨拶…… 2
図書館医学部分館 増築・改修竣工記念式典 …… 3
重信キャンパスを訪ねてみませんか？…… 3
卒業生からのメッセージ…… 4
新任教授からのメッセージ…… 5
愛媛大学医学部同窓会会則…… 6
愛媛大学医学部同窓会会則施行細則…… 7
愛媛大学医学部同窓会　申し合わせ事項…… 7
第30回通常総会報告 …… 8
医学部附属手術手技研修センター開所式…… 9
医学祭を終えて…… 10
スタンフォード医療研修に参加して…… 10
医学部武道場改修記念『武道場開き』…… 12
同窓会報告…… 13
支部紹介…… 14
医学部医学科人事異動…… 15
お知らせ…… 16

会　長　挨　拶

高田　清式
（昭和56年卒・３期生）

東日本大震災から３年たちましたが、同窓の皆様もいまだ少なからずの影響をお感じの方も多いことと存じます。この夏は全国的に天候不順や台風で集中豪雨などにより多くの地域で大変な思いをされた方も多かったことと存じます。今年のでき事や話題として、冬季ソチオリンピック開催、ブラジルでのサッカーW杯などのスポーツの大きな話題の反面、シリア地域の中東諸国の国際的紛争、ウクライナ情勢などの人命が大きな問題として取り上げられています。わが国周辺でも、隣国との領土主権問題、集団的自衛権の賛否などをはじめ多くの話題もあり、さらに医療の分野でも地方の慢性的な医師不足、iPS細胞の実用化、STAP細胞問題など、やはり問題や話題は毎年尽きません。さて昭和48年に創設されたわが愛媛大学医学部は昨年に40周年記念事業を盛大に行い、さらなる発展を目指し41周年目になり、この３月には第36期生が学窓を巣立ち（医師国家試験の今年の合格率は88.2％で国立大学平均91.5％に比し残念ながら昨年同様不振、次回捲土重来を期待）、国内外のそれぞれの医療現場で会員の皆様が毎年積極的な活躍を行っておられます。益々の会員皆さまのご活躍を期待しております。大学の近況としては、教育面では平成18年度から導入された「地域特別枠自己推薦（推薦Ｂ）」入学者が最高学年の６年生になり（初期は定員10名、現在は17名）臨床実習を９月に終え卒業試験に励んでおります。現在は、一般入試65名、推薦Ａ（学校推薦）25名、推薦Ｂ 17名、学士２年次編入５名の計112名が１学年あたりの定員になっております。このように学生の人数も90人だった時代より増加しており、より一層の医学教育の充実を図る必要性を感じているところです。また、地域医療に従事する医師の確保を目的に県の委託により一昨年４月に地域医療支援センターを開設し、地域医療学関係の各寄付講座と連携し、地域医療を担う医師養成の拠点としての役割を担うため地域病院見学バスツアーや地域住民や各地域病院へのアンケートなども行い軌道に乗せつつあります（地域医療支援センターのホームページもご参照願います）。また特筆すべきことの１つとして、昨年10月にソウル大学から地域医療に関する調査団が当大学の取り組みを参考にしたいと来訪（韓国でも医師の偏在など深刻化）されました。なお、今後は国際グローバル化に対応するため臨床実習の充実などが全国医学部の急務になり、日本医学教育学保障評議会（JACME）が発足し2023年までに医学教育が国際基準に達しているかの認定評価を各大学が受ける必要となり、大学病院の各診療科とともに県内の各病院での臨床実習も質量の点でもさらに充実させつつあります。さらに、基礎医学分野の教育面では、文部科学省Good Practiceに当大学の「医学・医療の高度化の基盤を担う基礎研究医の養成」が一昨年採択され、今や順調に実行され多くの医学生が研究に切磋琢磨し学内の発表のみならず、全国学会や欧文論文掲載で多くの活躍をしていることもご報告申し上げます。設備面では、昨年12月に国内大学初の医学部附属手術手技センター（御遺体を用いた手術手技研修を目的に全外科系診療科が使用）、本年１月に附属病院人工関節センター設置、２月に図書館医学部分館の改修・増築を完成、２月に武道場が新築完成、８月に医学部附属Aiセンターを設置（法医学における異状死体の原因究明目的）など教育・研究・診療面でますますの充実を図りつつあります。また、本年５月22日に「名誉教授を囲む会」を全日空ホテルで開催し初代から現在までの多くの教授が集まり親睦・交流を深めました。さらに話題として、第４回目の白衣授与式を本年４月24日に全５年生に（臨床実習開始前）厳かに挙行しました。今後も良き愛媛大学医学部の伝統行事として継続したいと思います（医学部や総合臨床研修センターのホームページをご参照ください）。わが同窓会としても、医学部の発展のためにより多く寄与できるように今後も頑張る所存ですので何卒宜しくお願い申し上げます。また、今回も遠方の会員の皆様に大学をよく知っていただくことを目的に、私ども附属病院総合臨床研修センターが毎年作製しております「専門研修案内」を、檜垣現病院長とも相談し今年も会員の皆様に同封し配布いたします。大学病院の近況のご理解に役立てば幸甚です（これを機に大学へ戻って来られる会員の方も大歓迎です）。最後になりましたが、この激動の年も、会員皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

図書館医学部分館 増築・改修竣工記念式典

平成26年4月15日(火)、
図書館医学部分館で、増築・改修工事の竣工を記念して、
学長、理事らの出席のもと記念式典を行いました。

図書館では、平成25年8月から医学部分館の増築･改修工事を実施していましたが、2月28日に無事竣工し、これを記念して増築・改修竣工記念式典を行いました。

記念式典では、赤間道夫館長の挨拶の後、柳澤康信学長から、「実際に増えた面積は約1.5倍だが、以前の狭かった印象とくらべると3倍にも4倍にも広くなったように感じる。学生諸君には、アクティブラーニングを推進する“学びのスペース”として大いに役立てて欲しい。」との祝辞がありました。

テープカットの後、高田泰次医学部分館長から、今回の改修により座席数が135から216へと大幅に増えたこと、パソコンルームやグループ学習室を備え、学びのための環境が充実したことなどの説明があり、公開された館内を見学した出席者は、明るく広くなった館内の様子に、喜びと満足感を感じていました。

明るく広々とした学習スペース

重信キャンパスを訪ねてみませんか?

愛媛大学医学部は、昨年創立40年を迎えました。私が着任した1976年には、重信キャンパスはむき出しの土と医学部棟、病院棟のみが建っている工事現場でしたが、今はいろいろな建物、施設ができ、木々が大きく成長し、立派なキャンパスになっています。

私は、このキャンパスの鳥を見、声を聞くのを楽しみにしています。今日は台風18号の到来間近で、風が強く、曇っており鳥の姿は少なかったのですが、病院北の新しくできた公園で、ジジジー、ジジジーと鳴いて、餌を探しているシジュウガラを数羽見ることができました。天気の良い日には多くの鳥がいます。年中いる留鳥、季節季節の渡り鳥、また、稀に渡りの途中の鳥を見ることができます。

この中で、私が魅せられているのはアオバズクです。アオバズクはハトより一回り大きいフクロウ科の鳥です。胸に茶色の斑があり、凛として、目のぱっちりいた可愛い鳥です。青葉の季節に東南アジアから渡ってくるのが名の由来です。夕方から夜にかけてホー、ホーと良く響く声で鳴きます。7月の初旬から、巣を守っている親鳥(オス)の姿をみることができます(写真)。7月の末に巣立ちをします。昼間は枝にじっととまっています。日が暮れると、活動をはじめ、飛ぶ練習をする雛鳥、それを教え、付き添い、見守る親鳥をみることができます。アオバズクに出会えたら、不思議ですが、幸せな気持になります。雛を育てているアオバズクは神経質です。驚かさない様に静かに見てください。雛鳥が遠くに飛べる様になる9月には、重信キャンパスを離れ、大きな森に行き、秋が深まった頃に東南アジアに旅立ちます。

アオバズクは、以前東温市のいろいろな場所にいましたが、今は、滅多に見ることができません。毎年重信キャンパスに来て繁殖するのは、大きな洞(ほら)のある木があり、セミなどの餌に恵まれ、また安全な場所であるからでしょう。重信キャンパスには、鳥を含め多くの生き物が棲息しています。アオバズクを見ていると、他の生き物との共生が大事であることを実感します。卒業生の皆様、双眼鏡を胸に新しくなっている重信キャンパスを訪ねてみませんか。

(文責　特別会員　愛媛大学大学院医学系研究科　麻酔・周術期学　教授　長櫓　巧)

卒業生からのメッセージ

八杉　巧（昭和57年卒・４期生）

（愛媛大学大学院医学系研究科　看護学専攻　臨床看護学　教授）

平成26年４月１日付で、愛媛大学大学院医学系研究科臨床看護学教授を拝命いたしました。今年は、本学に看護学科が創設されて20周年にあたり、節目の時期に着任し、身の引き締まる思いです。私は、本学医学部の第4期卒業生で、卒後愛媛大学第一外科に入局し、医師としてのキャリアも30年を超えました。外科学教室は2009年に大講座制となり、旧ナンバー外科から再編されて現在病院では「心臓血管・呼吸器外科」の一員です。そうです、学部で看護学生の教育、病院で外科医として手術・外来・病棟業務を行う「二刀流」です。看護学科、医学科の双方によい効果をもたらすよう、また、いずれにも支障を来さず業務をこなすように時間の使い方に腐心する毎日です。看護学教員として私に与えられたミッションは、講義とともに①県内唯一の特定機能病院であることから高度な医療・看護を教育研究の場として活かす、②次世代の教育者を育成する、③専門看護師（ CNS: Certified Nursing Specialist ）養成コース開設に向けて、フィジカルアセスメント・病態生理学・臨床薬理学の就学を促進すること、などの一翼を担うことです。根底には愛媛大学医学部の基本理念である「患者から学び、患者に還元する教育・研究・医療」があることは言うまでもありません。私自身は平成６年に県立北宇和病院から帰学し、20年間大学医学部で臨床・教育・研究に携わってきました。僅かではありますが、看護師教育も行ってきたつもりです。本来医師と看護師は異なる職種ではありますが、双方がお互いを高め合っていくことが理想の姿であることは万人が承知している事柄です。しかし、「医師が看護師を育て、看護師が医師を育てる。」ということを実践するには、現時点では各種の制限が存在することも事実だと思います。外科医師として培ってきた様々な経験や困難に打ち克った体験を活かして、医師・看護師が効率よく、有機的に力を発揮できるような次世代の環境作りにも努めたいと考えています。看護学科と病院は同じ敷地内ですが、行き来するには片道800歩の距離で、１日数回往復してよい運動となっており、若干体型がスリムになりました。取り組むべき問題も多々ありますが、少しずつ、かつ着実に自らも前進したいと思っています。浅学非才の身でありますが、本学の発展のために尽力する所存ですので、同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りたく存じます。何とぞよろしくお願い申しあげます。

羽藤　直人（平成元年卒・11期生）

（愛媛大学大学院医学系研究科　耳鼻咽喉科・頭頸部外科学　教授）

愛媛大学医学部同窓生の皆様、11期生の羽藤直人と申します。平成26年４月より、耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の教授を拝命しております。私は愛媛県今治市に生まれ、今治西高等学校を卒業後、愛媛大学医学部に入学いたしました。平成元年に卒業後、耳鼻咽喉科学教室に入局し、各２年間の松山赤十字病院勤務と米国スタンフォード大学留学を除けば、愛媛大学医学部に永らくお世話になっております。これまで育てて頂いた愛媛大学医学部の教授となり、母校や地元愛媛に恩返しできる立場となったことは、何よりの幸せであり重責を感じております。「愛媛愛」「愛媛大学愛」は誰にも負けない自負があります。これから16年間、「愛」にあふれた耳鼻咽喉科・頭頸部外科教室を、「愛」ある愛媛の地で育てたいと考えております。

皆様ご存知の通り、当教室は昭和51年に柳原尚明教授により開講、平成８年より暁清文教授に引き継がれ、私で三代目となります。当教室の同門会は「円通会」と名付けられ、現在会員は130名を超えています。関連病院を含めた医局員は53名（大学内19名）、愛媛県内を中心に23の関連病院が有ります。開講以来の当教室のモットーは「人が最大の資産」であり、医局は明るく風通しが良いのが自慢です。「耳鼻咽喉科・頭頸部外科のおもしろさ」を少しでも多くの医学生、若手医師に伝え、人が集まる医局を目指したいと考えています。

これまで当教室では、国際的に勝負できる教室作りを目指し、高いレベルの研究成果を世界に向け発信してきました。耳鼻咽喉科領域には、病因や病態が未だ解明されていない難治性疾患が数多くあります。これらの謎を解き明かし、新たな治療法を提供することが研究の目的であり醍醐味です。Bell麻痺や虚血性内耳障害の病態解明と治療法の開発成果は、国際的にも高く評価されております。また、世界初の人工中耳の臨床応用を行い、最近では新型骨導人工中耳の開発を行っています。なお、臨床における耳鼻咽喉科診療の使命とやりがいは、「最高レベルの機能温存・再建治療」にあると考えています。患者QOLに直結する聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚などの感覚機能と、発声、構音、嚥下、顔面表情などの運動機能を維持、改善、再生させる取り組みを加速させるつもりです。また、「研究に根ざした臨床」をさらに発展させることで、愛媛の地域医療のレベルアップに貢献したいと考えています。

なお、現在私は同窓会の副会長も務めさせていただいております。創立50周年に向けて、皆様には益々のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新任教授からのメッセージ

久門　良明

（愛媛大学大学院医学系研究科　地域医療再生学　教授）

私は、昭和52年に和歌山県立医科大学を卒業して２年間の研修を終えた後、昭和54年4月に愛媛大学脳神経外科学講座に入局しました。昭和58年４月からは県立中央病院を皮切りに、県立今治病院、市立宇和島病院で勤務しましたが、平成３年より大学に戻り本年３月末まで在職しました。そして、本年4月より、地域医療再生学講座を担当することになりました。

それぞれの場では、脳神経外科医として必要とされる診療、研究、教育に務めてきました。ここ数年は、学外にも眼を向けて活動してきました。その中でも脳卒中医療連携に関する活動では、急性期病院診療の実態やリハビリテーション・在宅医療との連携の意義を知るとともに、大学の社会への役割も認識するようになりました。つまり、脳神経外科学を学ぶとともに大学人として社会に貢献することの意義も見えてきたように思います。

医師不足は以前より指摘されてきましたが、従来はへき地医療を担う医師の確保が問題でした。しかし現在は、県庁所在地以外の地域基幹病院での医師確保が問題になっています。県下でも医師の偏在は明らかで、若い医師は南予や東予への勤務を避ける傾向にあります。研修医制度変更による医局主導の人事が崩れたことも一因で、良い面もありますが、現場の状況を考えると地域医療の崩壊は時間の問題です。また、診療科による医師数の偏りもあり、個人の希望も尊重すべきですが、対応策を考えるべきであるように思います。

県下の医師不足を是正するには、若い医師が希望や目的意識をもって勤務地に赴任できる環境やシステム創りも欠かせません。各講座は、人事の全体像を長期的に示して、誠実に実践していく責務があります。また、地域枠の学生が本年から卒業しますし、本枠の学生数が増員される見込みもあります。赴任する彼らに期待していますが、精神的負担をかけないように、地域の中核病院でも、専門医が取得できる教育システムを構築する必要があります。そのためには、大学各講座の協力も欠かせません。いずれにせよ、長期的解決策を講じることが急務となっています。

今後は、大学および宇摩地区での脳神経外科診療、研究、教育に携わりながら、それを足場にして、県下の地域医療の再生に貢献していきたいと考えています。同窓会の先生方には、様々な場面でご助力を賜ることと思いますので、今後ともよろしくお願い致します。

三宅　吉博

（愛媛大学大学院医学系研究科　公衆衛生・健康医学　教授）

この度平成26年７月１日付けをもちまして、愛媛大学大学院医学系研究科公衆衛生・健康医学講座教授を拝命いたしました三宅吉博と申します。

私は大阪で生まれ育ち、昭和61年に大阪明星学園明星高等学校を卒業しました。一浪後、防衛医科大学校医学科に進学し、例えようのない貴重な経験をすることができました。後に恩師となる古野純典先生は、私が４年生の時に福岡大学より教授として赴任され、公衆衛生学の講義で熱心に疫学のお話をされており、この講義が私の原点となっています。平成５年、防衛医科大学校卒業後、京都大学医学部附属病院老年科で１年間、静岡市立静岡病院内科で２年間研修をしました。平成８年に、京都大学大学院医学研究科内科系専攻に進学いたしましたが、分子生物学的研究は向いていないと確信し、古野純典教授が防衛医科大学校から九州大学に異動されていたことから、平成９年より九州大学大学院医学系研究科社会医学専攻に転学しました。その後は疫学者としての道をひた走っています。

ポスドクではアレルギー疾患のリスク要因解明を第一義にいくつかの疫学研究プロジェクトを企画運営して参りました。「大阪母子保健研究」や「九州・沖縄母子保健研究」と称する出生前開始コーホート研究を主導しております。アレルギー疾患以外にも、周産期うつ症状、出生時低体重、歯周病、う歯等のリスク要因も評価しております。また、特発性肺線維症やパーキンソン病といった難病の症例対照研究にも従事しております。

今後、分子生物学と疫学が両輪となって医学研究を推進できる医学部のみが生き残れると確信しております。疫学では、一次予防に資する公衆衛生の疫学と臨床での疫学を明確に分けることも重要です。臨床研修を終えた医師が、根拠に基づく医療をより深く考えるために臨床疫学を指向するのは極めて合理的であります。その受け皿として横断的な臨床疫学拠点が存在すると、大学として強い武器となることでしょう。一方、Nurses’ Health Studyのような公衆衛生の疫学プロジェクトが存在することも極めて重要です。公衆衛生の疫学が中核をなすことで、臨床疫学研究の学術的な底上げが期待されます。このような体制を構築できればアジアでトップクラスの疫学研究拠点となり得ます。この目標に向け、全身全霊、突き進む所存です。どうか、同窓会の先生方におかれましては、熱烈なご支援を賜りますよう、何卒、よろしくお願い申し上げます。

医学部附属手術手技研修センター開所式

平成25年12月18日（水）、愛媛大学医学部附属手術手技研修センター開所式を挙行しました。

本学医学部における手術手技研修組織として、本年12月1日（日）、手術手技研修センターを設置しました。本センターは、学内外の医師を対象に研修を実施し、手術手技の向上に寄与するとともに、手術手技の向上を通じて医療安全の向上をはかり、県民福祉への貢献、ひいては国民福祉への貢献を目指します。

このセンターでは、御遺体を使用した研修が行われるため、若手医師の手術手技教育の実施のみならず、ベテラン医師による新たな術式の開発等を行うことも可能となります。御遺体を手術手技の研修に使用することは、欧米では盛んに行われていますが、日本においては、平成24年に日本外科学会と日本解剖学会による「臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン」が出され、本研修を実施することができるようになり、本学でも本研修に取り組んでいます。

開所式では、始めに、安川正貴医学部長と大西丘倫手術手技研修センター長による挨拶、柳澤康信学長による祝辞がありました。その後、愛媛大学白菊会（本学医学部へ献体登録をした方々の組織団体）の阿部喜教理事長、森實榮一副理事長、増口和夫副理事長、犬飼美子副理事長及び本学関係者による除幕式を行い、施設見学を行いました。

開所式には、学内外から約100人が出席し、新センターの門出を祝いました。

安川医学部長による挨拶

大西手術手技研修センター長による挨拶

柳澤学長による祝辞

除幕式

施設見学1

施設見学2

医学祭を終えて

第38回愛媛大学医学祭実行委員長　**井上　直弥**

今年は5月17日、18日に医学祭が開催されました。今年で38回目となった医学祭ですが、今まで先輩方が作ってきた医学祭に負けないよう、自分たちなりに最高の医学祭にしたいという思いのもと、実行委員会一同準備に取り組んできました。こうして第38回医学祭を無事終えることができたのも、在校生、OB・OGの方々、大学の先生方、そして地域住民の方々のおかげだと思っております。

私たちは第38回医学祭のテーマを「LINK」とさせていただきました。このテーマは「医療に関わる全ての人とのつながりを大切にしたい」という思いが込められています。

医療従事者、患者様はもちろんのこと、その家族や地域とのつながりを大切にすることがこれからの医療には必要です。そのため地域について学び、地域に根付いた医療従事者がこれからも増えてほしいと考えています。愛媛という地域を知り愛して欲しいという願いがあります。今年の医学祭では医学生のみならず、様々な人たちに私たちの住む愛媛について知っていただきたいと願いのもと、第38回医学祭を作り上げてきました。講演会ではレインボープライド愛媛さんをお招きし、「医療とセクシャルマイノリティ」をテーマにご講演いただきました。また、内部講演には愛媛大学大学院医学系研究科　法医学講座の浅野水辺教授に「法医学と社会の関わり　ー人の死を科学する法医学ー」についてご講演していただき、医学部生のみならず様々な性別、年代の方々に関心を抱いてもらえる講演会になったのではないかと思います。今年も去年に引き続いて、愛南町と内子町の方々に来ていただき特産物を販売していただいたり、キャンパスツアーや看護科一日体験実習など様々な企画で大盛況を呼びました。

どの企画においても、私たち実行委員の力だけでは到底成し得ることはできませんでした。地域の方々や諸先生方をはじめ、多くの方々のご理解とご協力のおかげで、第38回医学祭は成功を収めることができたと思っております。

今年は天候に恵まれ、快晴のもとすべての日程を無事終えることができました。医学祭の後、多くの学生に「今年の医学祭は楽しかった」、「本当にお疲れ様」などの声をかけていただき、実行委員としてこの上ない喜びを感じました。この経験を後輩たちに引き継ぎ、来年以降、今年以上の医学祭を作ってもらいたいと思います。

これまでご協力して下さった皆様方、本当にありがとうございました。実行委員一同心より感謝申し上げます。

スタンフォード医療研修に参加して

■ 明石　倫子（４年生）

（右端）

2013年、夏のスタンフォード研修プログラムに参加しました。このプログラムに参加しようと考えた理由は２つあり、ひとつは最先端といわれるアメリカの医療を見てみたかったこと、もうひとつは自分の英語能力の向上のためです。

このプログラムは３週間スタンフォード大学に滞在し、医療現場の見学などを行うというものなのですが、私は海外での長期滞在は初めてであり、正直自分の英語能力に自信がなかったため、行く直前までとても不安でした。

しかし、実際に行ってしまうと、とても楽しく充実した日々を送ることができました。プログラムを支えているスタッフの方々はとても親切で、年も近いためとても仲良くなることができました。また、プログラムに参加している学生は日本人だけでなく、中国や台湾からも来ていたため、色々な話が出来てとても楽しかったです。

プログラム中では病院・ホスピスなど医療施設の見学、医療英語の授業、医療関係者や患者さんのお話、テーマに沿ってグループでプレゼンテーションを行う等の機会がありました。

その中でも特に印象に残ったことは、病院見学に行った際、眼科の手術を見学出来たことです。私はそれまで手術を見学する機会があまりなかった上、アメリカで手術を見ることができるとは思っていなかったため、忘れられない体験となりました。

このプログラムに参加して多くのことを学ぶ機会に恵まれましたが、中でも多くの友人ができたことと、英語を学ぶモチベーションとなったことは大きな収穫だと感じました。英語だと自分の言いたいことがなかなか言えず、もどかしさを感じ、自分の英語能力の低さを痛感しましたが、一方で英語を話すことへの抵抗が少なくなりました。

今回、色々な人に出会い、お話を聞くことで自分の中の世界が少し広がったように感じます。このような貴重な体験ができたことにとても感謝しています。

最後に、このプログラムに参加するにあたって力を貸してくださった皆様に深く感謝致します。

■ 泉本　麻耶（４年生）

（後右から２番目）

私はこの春休み、スタンフォードとサンフランシスコに滞在し、アメリカの医療を学ぶプログラムに参加した。医療保険制度、臓器移植、医学教育などの幅広い分野を学び、また実際に医療現場を覗くことで、多くの視点からアメリカの医療を知ることができた。それは同時に日本の医療の良さと問題点を考えることにもつながった。さらに医療分野だけでなく、現地の大学生と共に過ごすことで、日本とは全く異なる文化や人々の性格なども感じ取り、海外経験の少ない私にとっては価値観が一瞬でくつがえるような思いだった。また、自己主張の強い空気の中で、自分についても改めて考えるきっかけとなった。そして何より、英語力の大切さを痛感した。国際的に意見を交わすためには、英語は必要不可欠なツールだと感じた。学生生活の折り返し地点に立った今、このようなプログラムに参加できて本当に良かったと思う。ずっと大切にしていきたいと思える仲間と出会え、これまで漠然としていた自分の将来像を明確に掴むことができた。最後になりましたが、私にこのような素晴らしい経験を下さった両親、先生方、応援し支えてくださった全ての方に、心より感謝致します。

スタンフォード医療研修に参加して

■ 山内　美聡（２年生）

（右から7番目奥）

今回、私はEHCのプログラムに参加させていただいたことで、 考えていたよりも多くのことを学ぶことが出来ました。

今回のプログラムで印象深かった点は、アメリカと日本の医療の違いを実際に見ることができた、という点です。今回、私はスタンフォード大学の付属病院で、小児科の回診を見学させていただくことができました。その回診では、患者さんとその保護者の方々、そして医師だけでなく、理学療法士や看護師などが一緒に治療方針について、話し合っていました。その患者さんの治療に関わる全てののスタッフが、対等な立場で意見を主張していること。また、その場に患者さんと、患者さんのご家族の方々が同席しているということが、とても新鮮でした。このような方針をとることで、患者さんの意見をより取り入れやすくなったり、患者さんの不安を軽減したりできている、ということがわかりました。

この他にも、様々な点で、日本とアメリカの医療は異なっている、とわかりました。この考え方を持つことは、自分がこれから提供していく医療について考えていく時に、大変役立つだろうと思います。このような貴重な体験をさせていただけたことは、大変ありがたい、と思います。今回のプログラムを企画してくださった、VIAのスタッフのみなさんや、ご協力をいただいた大学の関係者の方々、本当にありがとうございました。

■ 大塚　由理（４年生）

（左端）

今回、私は８月３日からの３週間スタンフォード医療研修に参加させて頂きました。このプログラムでは、スタンフォードやUCSF(University of California, San Francisco)の大学病院、Free Clinic、子供のためのホスピス等を見学したり、アメリカの医療従事者や臓器移植をうけた方々から直接話を伺い、アメリカの医療について学ぶことが出来ます。

私がこのプログラムに参加して一番良かったと思うことは、自分の視野が広がったということです。私はアメリカの医療現場を直接見ることによって日本の医療との違いを発見することが出来ました。特に医療従事者が患者さんの治療をする際に、身体的な面だけでなく宗教や音楽、絵画を用いて患者さんの精神面をサポートしたり、患者さんの医療保険制度などの金銭的な面を考慮していたのが印象的でした。

このプログラムには日本、中国、台湾の医学生合計34名が参加しました。どの参加者も好奇心が旺盛で、学年など関係なく積極的に質問をしていたことに驚きました。また参加者の約半分が将来アメリカで働くことを志しており、彼らの目的意識の高さに私は大いに刺激を受けました。これに加え、スタンフォード大学の学生数名がコーディネーターとして私たちの生活をサポートして下さいました。どの方も親しみやすく困ったときにはいつでも相談に乗って下さり、安心して研修生活を送ることが出来ました。参加者やスタンフォード大学の学生と他愛もない話から将来の話まで様々なことを話したことが今でも忘れられません。

私は今回の研修で多くのことを吸収することが出来ましたが、もっと専門的な内容を英語で話したかったという後悔もあります。今後更に語学、特に英語を勉強したいと思いました。

今後の医学生生活において、このプログラムでの経験を生かし目的意識を持って日々の勉強に努めたいと思います。

最後になりましたが、このような素晴らしい経験をすることができたのは、たくさんの方々の支えがあってのことだと思います。心から感謝申し上げます。

■ 豊澤　摩耶（１年生）

（左側）

私はこの夏、MEDプログラムという、アメリカで三週間の寮生活を送りながら、アメリカの医療システムについて学ぶプログラムに参加しました。結論から言えば、三週間、とても充実した日々を送ることができました。アメリカの医療従事者を講演を聞いたり、現地の医学生と食事をしたり、ここには書ききれないほどたくさんの経験ができました。その中でも、この夏のプログラムで、私にもっとも大きな影響を与えたのは、三週間の全ての行動を、台湾や中国の医学生や、学外の日本の医学生たちと共にしたことです。育った環境が全く違う、台湾や中国の学生と話すことはとても刺激的で、話題がたえませんでした。彼らは、とてもアクティブで魅力的であり、英語も流暢であり、私は海外の医学生の能力と意識の高さにとても驚かされました。また日本の医学生の参加者も、モチベーションがとても高く、さまざまな場面で自分たちの将来について話したりしました。私は一回生だったので、医学の知識が少ないという不利な点もありましたが、低学年で行ったからこそ、これからの５年間をどのように過ごすかを深く考えるきっかけになったと思います。このような素晴らしいプログラムに参加する機会を与えてくださった、愛媛大学、そして両親に心から感謝します。ありがとうございました。

♪楽器類のご寄付のお願い♪

２年前に吹奏楽部が創部されましたが、楽器等が不足しています。
不要の中古楽器をお持ちでしたらご寄付または拝借できれば大変有りがたく存じます。木管、金管なんでも結構です。
加えて、室内合奏団(バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス等)、邦楽部(17弦、13弦の琴、立箏台、チューナー、録音装置、メトロノーム等)、合唱団(アップライトピアノ等)もよろしくお願いします。

連絡先：学務課学生生活　TEL 089-960-5178, 5177　FAX960-5133,　または　同窓会事務局

医学部 武道場改修記念『武道場開き』

平成26年2月28日(金)、医学部で武道場開きを行いました。

医学部では、現在、学生等の教育環境改善事業を進めています。その一環として、2月14日(金)に武道場の改修工事が竣工となり、これを記念して武道場開きを行いました。

看板上掲式の様子

安川研究科長による挨拶

武道場開きでは、安川正貴医学系研究科長の挨拶と柳澤康信学長の祝辞の後、学生を代表して空手道部主将の中城晴喜さんが、「立派な武道場を造っていただき誠にありがとうございます。私たちは、柳澤学長、安川研究科長を始めとする多くの先生方にご指導をいただきながら、この愛媛大学で様々な経験をし、出会った多くの仲間と、将来のために切磋琢磨して参りました。これからも、夢と希望をもって、それぞれの道に向かって精進し、愛媛県の医療を担う一員として、たくましく成長していきたいと思います。」とお礼の言葉を述べました。

続いて、武道系各部(剣道部、合気道部、空手道部、柔道部)の学生が演武を披露し、集まった約120人の参加者から暖かい拍手が送られました。

剣道部による演武

合気道部による演武

空手道部による演武

柔道部による演武

記念撮影

同窓会報告

３期生同期会報告

平成26年８月30日夕方に、還暦前後になったわれわれ３期生の同期会を松山ワシントンホテルで４年ぶりに行いました。近隣だけでなく愛知や大阪、九州からの参加もあり、この日のためにと合計34名の同期生が集まりました。卒業後遠路はるばる初めて出席した人も幾名かあり、和やかな会になりました。近況報告では各自が工夫したスライドを駆使し、また懐かしく当時の思い出を語りあい、楽しく時が過ぎました。昨年の医学部創設40周年記念ビデオも良い機会であり上映いたしました。還暦前後になり各自は開業や公的病院などで今なお活躍しつつある近況ですが(かなり白髪が増えたりもしていましたが、皆あまり容姿・体型は変わっていませんでした)、独自の余暇の過ごし方(サイクリング、マラソン、旅行など)と健康の有無、自分の子供の縁談募集なども昔話とともに主な話題の１部でした。また、ななつ星の旅券の抽選に当選した報告もあり歓声が上がりました。全員が２次会にも出席し、またの再開を約束し深夜まで盛会となりました。

（文責　高田　清式）

25期生同期会報告

平成26年9月13日、ホテルJAL city松山にて卒後約10年で初となる同窓会を開催しました。ふとしたことから開催を思い立ち、過去の連絡先を頼りに互いに連絡をとってもらい、開催に至りました。

初となる同窓会は34名、私を含め約半数が県外からの参加で、中には卒後初めて愛媛に来るという方もいました。10年の月日で容姿は多少変われども、１次会は学生時代と同じように盛り上がり、思い出話に花を咲かせていましたが、一人ずつの近況報告になると、みな各々の話を聞き入っていました。仕事でも家庭でも責任が増えていく立場で活躍している同期の姿に、時の流れを感じるとともに、明日への活力を与えてもらったように思います。その後の２次会には23名が参加し、楽しく飲み語らい、またの再会を誓って会を終えました。

今回、みなで再会を喜び合えることができ、本当に企画した甲斐があったと感じました。これを機に定期的に同窓会が開催できればと思います。数年後にまた再会しましょう！今回残念ながらご参加できなかった方、次回のご参加を心よりお待ちしております！

（文責　石田　道拡）

支部紹介

第12回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会 報告

平成26年1月25日　東京ベイコート倶楽部
グランドボールルームにて開催

今回は第12回開催なので、司会進行は12期生の菊池孝先生と大田快児先生が担当。教育講演は12期生を代表するお二人。

宮崎龍彦先生(岐阜大学病院病理部　臨床教授)は、「ゲノム医学からポストゲノム医学へ　膠原病感受性因子の探索を例に」。日浅陽一先生(愛媛大学大学院　消化器･内分泌･代謝内科学教授)は「医師として生み、育んでくれた愛媛大学のために」を講演。母校の卒業生が母校や他校の教授となり、全日本や世界と勝負している現状を実感。

一方、初代関東支部会長吉田謙一先生は東京大学法医学教室主任教授を退官され、東京医科大学法医学教室主任教授に御就任。関東地区の同窓生も414名まで増加。

宮崎龍彦先生のトランペット演奏と海外での武勇伝報告もあり、とてもエキサイッティングな夜でした。

(文責　酒向　正春)

第５回愛媛大学医学部同窓会近畿支部総会 報告

第５回近畿支部総会が平成26年5月17日、大阪市の三井ガーデンホテルにて開催されました。

近畿支部は平成12年に同窓会最初の支部として発足しましたが、その後活動が停滞してしまい、平成23年に活動を再開、以降毎年の総会開催を続けてきております。そのため一番古いにもかかわらず今年が第5回というわけです。近畿在住の同窓生は現在500名以上になりますが、77名の参加がありました。

今回、大阪府立成人病センター病態生理学部門　高橋　克仁先生(Ｓ58卒)に「稀少がん、肉腫の新治療戦略　～水平分業型の共同治療連携と血管新生阻害の新規分子標的治療～」と題した記念講演をしていただきました。現在の肉腫診断、治療の現況などを踏まえ、実地医家にも分かりやすく、すぐ明日からの診療に役立つ講演でした。

病院紹介では新築となった関西電力病院の紹介をして頂きました。

総会議事の後、懇親会に移り、物故者への黙祷のあと、恒例となったグリークラブＯＢのよる乾杯の歌で開会しました。和気あいあいとした雰囲気のうちに久しぶりに顔を合わせた同級生、クラブの先輩後輩といった話の輪が広がりましたが、予想したよりも参加人数が多く、立食ではかなりの混雑となってしましました。

近畿支部は、近畿一円に居住、在職の方で構成されています。毎年卒業生が多数近畿地方に就職してきていますが、個人情報保護の観点からなかなか全部を把握できない状況にあります。今回連絡がなかった方、その他地域の方でも参加ご希望の方(！)是非ご連絡下さいますようお願いします。

(文責　朴　信正　park618424@sunny.ocn.ne.jp)

支部紹介

第11回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会 報告

皆さんお元気ですか。今年も愛媛大学医学部同窓会九州支部を７月26日博多都ホテルにて行いました。出席者が14人と少人数でしたが、和気藹々とした雰囲気でした。

今回は愛大卒で現在は熊本大学大学院生命科学研究部　神経精神医学分野・神経精神科　講師の福原竜治先生に『認知症の行動・心理症状への対応と治療』のタイトルで講演をしていただきました。日常診療に役立つ非常に興味深い内容でした。

乾杯の後、会食の途中、昨年度愛大医学部創立40周年の記念DVDを鑑賞。創立当初の名物教授や愛大医学部創立までの歩みを懐かしく、当時を思い出しながら話が弾みました。今回、残念ながら恩師の先生が出席されておりませんでしたが、近況報告も交えながら自己紹介を行い、来年の再会を誓いました。

九州在住で同窓生の方がおられましたら、一人でも多く出席していただけるようご理解ご協力お願いします。毎年７月下旬の土曜日に同窓会を行っております。また、名簿作成も行っておりますのでご協力お願いします。

＜事務局＞　すみい婦人科クリニック　澄井　敬成　（８期生）　sumiic@k9.dion.ne.jp
九州支部長　角（すみ）　典洋　（２期生）　sumi-clinic@mx2.tiki.ne.jp

《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1．　個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- 同窓会名簿の作成
- 定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- 同窓会会費徴収のための業務
- 事務連絡及び各種文書の送付
- 支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

2．　個人情報の提供

会員から情報の照会依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承ください。

3．　個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用ＰＣで独立した作業を行っております。

《次号会報原稿募集》

★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

条件　1．20名以上の参加
　　2．報告文、集合写真を提出(会報原稿)
　　3．会費未納者への納入勧誘
　　4．3年に1回

★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

条件　1．報告文、写真を提出(会報原稿)

《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO．01620－0－6644

入会金　1万円　　終身会費4万円(**合計5万円**)

《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問いあわせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますで何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意いただきますようお願い致します。

《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想など是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

お知らせ

第31回
愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：平成27年５月15日（金）18時～
場所：臨床第２講義室
議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

連　絡　先

〒791－0295　愛媛県東温市志津川
愛媛大学医学部同窓会事務局
（器官・形態領域　解剖学・発生学講座内）
(旧解剖学第一講座)
ＴＥＬ：089－960－5231（受付10時～17時）
ＦＡＸ：089－960－5233
※平成27年4月より、089-960-5989（FAX兼用）に変更予定
E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp